

Xiaoqun Xu,

*Chinese Professionals and the Republican State: The Rise of Professional Associations in Shanghai, 1912-1937.*Cambridge: Cambridge University Press,
2001, xv+328pp.

小 浜 正 子

I

本書は、近代上海で活動した専門家たち (professionals)——具体的には医師、弁護士(「律師」)、ジャーナリスト——に焦点をあて、彼らの結成した「職業団体」の活動に注目して中国における近代化の過程や国家—社会関係の特徴を考察しようとしたものである。

改革開放政策下の中国で急速な社会変化が進行した1990年代、欧米および中国での中国近代史研究の中心は上海史をはじめとする都市史研究であった。本書の出版は、経済史から社会史へとその中心をシフトさせてきた都市史研究が、21世紀に入っても衰えを知らず、さらに幅を広げようとしていることを感じさせる。

1990年代の中国近代都市史研究の中では、中国における市民社会 (civil society) と公共領域 (public sphere) をめぐる問題が大きな議論の争点であった^(註1)。国家と社会の中間的な領域に関心が集まった大きな理由に、そこにおける各種の社团 (社会団体, associations) の活発な活動があり、ブルジョアジーを中心とする都市エリートの指導下にある商会・同業団体、同郷団体、慈善団体や、工会 (労働組合) に関する研究が進んでいる^(註2)。

こうした中であって、本書の特徴は、これまでの研究がブルジョアジーもしくは労働者を中心とする社团に焦点をあてていたのに対して、都市中間層、なかでも専門家層と彼らの結成した「職業団体」(後述) に注目していることにある。では、内容を検討しよう。

II

本書は3部9章と序論、結論よりなる。本書の目的は次の3つであり、3部構成の各々に対応している。第1に、中国の近代化の中での専門家の出現と新たな社会構成を提示すること (第1部「中国の専門家と専門的職業」)。第2に、他の社团と職業団体を区別する指標として専門化 (professionalization) を指摘し、その過程を国家建設との関連の下で検討すること (第2部「社会構造、国家政策、そして専門化」)。第3に、職業団体と国家および他の社团との関係、特にナショナリズムをめぐる職業団体の動きと、職業団体の政治化の様相から民国期の国家—社会関係の特徴を考察し、現代中国のそれと比較すること (第3部「プロフェッショナリズム、ナショナリズム、そして政治」)。

ここでは、第3章までは上海の専門家層全体について述べ、第4章以下は、章ごとに特定の職業に関して述べる、という方法がとられている。

第1部第1章「専門的職業と専門家たち」は、上海経済の近代部門の発展と、そこでの専門的職務につく被雇用者と専門家よりなる都市中間層の形成を述べる。著者は1935年の300万都市上海の専門家層の人数を約2万人と推計する。続く第2章「都市中間層としての専門家たち」では、その生活と意識を探る。彼らはカネ、ヒマ、教育がある都市文化の生産者、消費者であり、「知識と経験と職業倫理を持って、独立した精神で公共に奉仕する」という自己イメージを持った専門家としての生き方を提示する、新たな都市社会の構成員であった。

第2部第3章「民国と都市の社团」は社团に焦点をあて、国家—社会関係の構造を述べる。清末以来の都市社会では、多様な社团が叢生して活発に活動

した。政府はこれを統制しようとしたが、社団側はその目的や活動の公共性を主張して、自身の正当性を確保しようとした。南京政権は社団を再編し、それを通じて国民党政権の下に国民を統合する国家コーポラティズム体制を構築する。専門家は国民党によって農民、労働者、商人、学生などとは異なった「自由職業者」という独自の社会層としてカテゴライズされ、彼らは律師公会、医師公会、会計士公会などの「職業団体」（「自由職業団体」とも呼ばれる）に所属し、これらを通じて国民党政権に統合されるものとされた。

第2部第4章「民国と弁護士」と、第3部第8章「プロフェッショナルリズムとナショナリズム——上海律師公会(その1)——」および第9章「プロフェッショナルリズムと政治——上海律師公会(その2)——」は弁護士業を扱う。

弁護士は、国に法が存在し、そのエキスパートとして国家から認可を得ることで弁護士たりうる。それゆえ専門職の中でも特に国家への依存性が強い。中国では民国元年(1912年)、法院が設置され律師暫行条例が公布されて弁護士の職が確立し、強制加入による律師公会が各地に設立された。上海律師公会も成立したが、この団体はあまり活発でなく、「法治」、「司法の独立」といった職業倫理の確立のために積極的に活動することもなかった。ただ、上海共同租界内の中国人の裁判を扱う外国勢力主導の法廷である会審公廨の回収に対しては積極的に政府の交渉を助け、このケースでは、民族的目標に向かって、専門領域で国家と社会が協力した。

1931年の九一八事変後の国難の非常事態に際して、上海律師公会は、各界の社団による民族運動の盛り上がりの中で、特に目立った奮闘を見せた。だが国民党によって活動的リーダーが批判された後、律師公会はもはや目立った政治活動を行わなくなった。弁護士が多く逮捕された「抗日七君子事件」（1936年）の救済運動でも、律師公会は組織防衛を優先して沈黙を守った。「職業団体」は、他の社団ほどには国民党による抑圧を強く受けることはなく、その状態を維持するため、律師公会の公領域における活動はとりわけ慎重であった。

第2部第5章「民国と医師」と第3部第7章「国粋か科学か——医者たちの紛争——」では、民国政府と医師の関係が考察される。中国で医師の専門職としての正規化に際して問題になったのは、もっぱら中医と西医の関係、すなわち近代西欧医学を修めた西医だけでなく、伝統的な漢方医も、中華民国における正規の医療体系の中に認めていくかどうか、であった。南京政府は1929年、「科学」の旗印の下に、西医のみ正規化する案を打ち出した。これに対して中医側は、中薬（漢方薬）界や実業界の社団をも動員した猛烈な反対運動を行う。そこでは「国医（中医を彼ら自身はこう呼んだ）は国粋」、「国医は文化侵略を防ぎ、国薬は経済侵略を防ぐ」などの民族主義的なキャンペーンが展開された。結局、1936年に西医とともに中医も公認されて、中医側の運動が勝利を収める。この論争では、双方がともにナショナリズムという文脈の中で自己を正当化する言説^{ディスコース}を展開していたことが注目される。

第3部第6章「『文人』から専門家へ——上海のジャーナリスト——」は、民国期の新聞記者と「言論・出版の自由」について叙述する。民国初年、新聞は党派の主張の宣伝のためのものであり、記者の専門的訓練やプロ意識は低かった。記者の社団は、新聞社主の社団と異なって、特に言論出版の自由のために活動することもなかった。1930年代、国民党による厳しい検閲が行われる中、新聞記者聯合会は「報道の自由」を掲げてそれに抵抗するようになるが、政権の基盤を揺るがせるほどのことはなかった。

「結論」では、専門家の職業団体と国家との関係は、相互依存・相互浸透の関係だとされる。専門家は国家の認可に依存し、国家は専門家に依存して近代国家の建設を遂行する。民国期の国家—社会関係は、社団の公共性を前提として、公領域（public arena）において両者が相互依存し相互浸透し合う中で、国家と社会が互いを形成し再定義し合うものであった。それは専門家の職業団体だけに言えることではなく、他の部門の社団と国家との関係も同様である。また、再度社団の活動が活発化し専門家が活躍するようになりつつあるポスト毛沢東期の中国の国家—社会関係との類似も指摘できる。著者は、

このような民国期およびポスト毛沢東期の中国の国家—社会関係を理解するために、「相互依存のダイナミクス」概念の適用を提言する。

III

以上、本書のおおまかな内容をまとめてみた。

ブルジョアジーや労働者と国家との関係を活動拠点であった社団に注目して分析した手法を、専門家層についても適用した本書の試みは、成功しているだろうか。

他の社会層、特にエリート（ブルジョアジー）層の社団と同じく、公領域における専門家層の社団の活動は国家との相互依存のダイナミクスのもとに相互浸透を進めるものであった、という本書の結論に、評者は大きな異論はない。だが、そこで言われていることは、ブルジョアの団体と南京政権との関係についてのフェースミスの研究や、社団の公共性に関するグッドマンの研究、伝統医学と近代医学の関係についてのクロツァーの研究などで述べられたことを職業団体に関して確認したという感が強く、専門職について考察した結果、民国期の都市社会理解に新しい視角を得たという印象に乏しい [Fewsmith 1985 ; Goodman 2000 ; Croizier 1968]。

エリートの指導する商会、同業団体、同郷団体、慈善団体や労働者の工会が注目されたのは、なんといってもそれらが活発な活動を展開していたからである。ところが、専門職の職業団体について著者が検討した結果は、団体ごと時期ごとに違いを見せるとはいえ、概してその活動は低調であった、というものである。その低調さの理由は、国の認可によって専門家たりうるという国家への依存関係、専門性を維持するための政治的中立の必要性である。むしろ、会審公廨回収の際の律師公会のように職業団体が専門性を発揮して活躍した例も挙げられてはいる（第8章）。これは、外国勢力を相手に民族的目標、すなわち国家と対立しない目標に向かって国家と職業団体が協力したケースである。どうやら専門家層の場合、社団は常に公領域での活動の拠点となるわけではなく、彼らは別の方法で活躍していたように

見える。例えば「抗日七君子事件」の時、律師公会はたいして動かなかったが、個人的に熱心に運動した弁護士は多かった。であれば専門家層の公的役割を考察する際、職業団体に焦点をあてたのは有効な方法であったかどうか。

本書が専門家層に注目したのは、それが近代化に不可欠な独自の社会層だからである。著者は、弁護士の「法治」・「司法の独立」、ジャーナリズムにおける「言論・出版の自由」などの職業倫理の確立と社会的定着を「専門化」の指標として重視するが、それによって専門家層が独自の社会的役割を果たしうるからであろう。本書は、このような概念は欧米から中国に移入されたという。だが、それが中国における歴史的な脈の中でどのような意味を持ったのか——すなわち専門家層の社会的存在意義——については、比較史的な考察が必要だと考えられる。本書によると、こうした職業倫理は1920年代まではあまり定着せず、30年代になって強く主張されるようになった。そのことは、国民党政権の支配体制強化の下で、中国の専門家たちは独裁に抵抗するためにそれを主張し、その中で概念を実体化していった、というように読めなくもない。しかし、国民党政権の下では、民族主義を掲げた党義が職業倫理に優先することが前提とされており、専門家の職業倫理の確立は、すでに困難な条件下にあった。1930年代の「言論・出版の自由」、「法治」・「司法の独立」の強調をもってアブリオリに「専門化」の進展をいうのは、中国近代の歴史的な条件の下ではやや無理がなかろうか。また、そこでのせめぎ合いは、人民共和国内成立後の共産党独裁下における専門家のあり方を規定する前提ともなったのではないかとすれば、社会主義政権の時期を飛ばして民国期の専門家と毛沢東後の中国の専門家とを比定することには、もう少し慎重な手続きが望まれる。

中国史の文脈で専門家層を考えようとすると、近代上海の専門家の先駆者にも関心が持たれる。弁護士について、本書は、民国元年の法院の設置と弁護士認可から説き起こす。だが明清の中国民間社会には訴訟を請け負う「訟師」という者たちが（よかれ悪しかれ）活躍していたし、清末から租界に存在し

た会審公解では、外国人と渡り合うために近代法に明るい中国人の法律専門家がいやおうなしに育ちはじめていた。こうした者たちから受け継がれたような、中国近代独自の法律家の専門性や職業倫理といったものは、存在したのか否か。評者はこうした問題にとっても関心があるのだが、残念なことに本書は全く言及しない。

本書が従来研究されてこなかった民国期の都市中間層、なかでも専門家層の研究の嚆矢となった意義は小さくない。今後、より中国近代の文脈に即した分析視角からこの社会層についての研究が深化してゆけば、本書は先駆としての役割を果たしたことになる(注3)。

(注1) この議論にかかわる論稿ははなはだ多い。ここでは初期の代表的な論稿として Rowe (1990)、議論の成果と問題点を指摘したものとして Bergère (1997) を挙げておく。議論が進む中で、西欧起源の市民社会概念の中国への適用には無理があること、明末以降の中国社会には官民双方の力が浸透し影響し合う領域が存在したこと、などについておおむね意見の一致が見られるようになった。そして、その領域の具体相を、社団の活動の分析などを通して考察することに勢力が注がれている。これについては、小浜(2000)の「序章」も参照のこと。

(注2) Coble (1980)、Goodman (1995)、小浜(2000)、Perry (1993)、馬・朱 (1993)などを参照。

(注3) 最近の中国の都市史研究でも、都市中間層への関心が高まっている。熊(1999)の中でも、特に本書と関係が深い羅・宋(1999)では、都市中間層に関連する記述に多くが充てられている。

文献リスト

<日本語文献>

小浜正子 2000. 『近代上海の公共性と国家』 研文出版。

<中国語文献>

羅蘇文・宋鑽友 1999. 『上海通史 第9巻 民国社会』(熊月之主編) 上海 上海人民出版社。

馬敏・朱英 1993. 『伝統与近代的二重変奏——晚清蘇州商会個案研究——』 成都 巴蜀書社。

熊月之主編 1999. 『上海通史』全15巻 上海 上海人民出版社。

<英語文献>

Bergère, M-C. 1997. "Civil Society and Urban Change in Republican China." *China Quarterly* No.150.

Coble Jr., P. 1980. *The Shanghai Capitalists and the Nationalist Government, 1927-1937*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Croizier, R.C. 1968. *Traditional Medicine in Modern China: Science, Nationalism and the Tensions of Cultural Change*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press (邦訳は難波恒雄他訳『近代中国の伝統医学——なぜ中国で伝統医学が生き残ったのか——』創元社 1994年)。

Fewsmith, J. 1985. *Party, State, and Local Elites in Republican China: Merchant Organizations and Politics in Shanghai, 1890-1930*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Goodman, B. 1995. *Native Place, City, and Nation: Regional Networks and Identities in Shanghai, 1853-1937*. Berkeley: University of California Press.

——— 2000. "Being Public: The Politics of Representation in 1918 Shanghai." *Harvard Journal of Asiatic Studies* Vol.60, No.1.

Perry, E. 1993. *Shanghai on Strike: The Politics of Chinese Labor*. Stanford: Stanford University Press.

Rowe, W. 1990. "The Public Sphere in Modern China." *Modern China* Vol.16, No.3.

(鳴門教育大学学校教育学部助教授)